



子どもを退屈させない授業づくりを

新型コロナの影響でしょうか。教室訪問時に行われている授業は多くが講義型の一斉学習で、教師が喋り続けるスタイルです。教師の話に教室全体が盛り上がる場面もありますが、あくまで教師中心のやりとりで、子ども同士が交流する協働学習とは異なります。

皆の前で発言が許されるのは教師に指名された子ですから、他の子たちは「いいで一す」「合っで一す」しか言えず、残念がる子、不本意そうな顔をする子が多く見られます。

私たちの教室訪問は対象の子の行動観察が目的で、授業参観ではありませんが、子ども目線で見たとときの率直な感想として、「退屈な授業だな」「(大半の子は)よくも真面目にやってもんだな」と感じ、観察後の話合いで授業づくりにまで言及することがあります。



従順な子が多ければ、授業の進行に不都合は生じないのですが、順応性や耐性の低い子、感じるままをストレートに表現する子は何らかの気に障る反応を示します。

その行動自体は問題でも、置かれた状況すなわち**授業の在り方が、子どもの逸脱行動を誘発・増長している場合も少なからずあるように感じます。**

子どもを退屈にさせる授業の状況をいくつか挙げてみましょう。

- ① 教師の話が長い。ほぼずっと教師が話し続けている。
- ② 主活動が始まるまでの説明等が過剰で、子どもを待たせ過ぎる。
- ③ 教師の声がよく聞き取れずに分からない(マスクも影響)。
- ④ 教師の話が速くて/よく分からなくて/注意や叱責ばかりで聞く気が萎える。
- ⑤ 授業がつまらない(教師用指導書を頼ってばかりの授業は、明らかにつまらなくなる)。
- ⑥ 一つの活動(聞く、書く等)に費やす時間が、子どもの集中力の持続時間を超えている。
- ⑦ 課題が難しい上に、手がかりとなるものもないため諦めざるを得ない。
- ⑧ 課題が易し過ぎて物足りず、やる気が湧かない。
- ⑨ 教師のもとに並ばせての個別指導では、並んで待つ無駄な時間が長い。



これらに関連した授業づくりのポイントを整理すると次のようになるでしょうか。

- ・子どもがストレスなく聞けるための**話す力**(上記①~④)。マスクして話し続ける息苦しさもあり、これを機に、**何について、どれくらい、どのように語るのか**を意識して準備。
- ・教師用指導書に過度に依存した授業づくりからの脱却(⑤)。**展開に創意工夫**を。
- ・聞く、書く、発表するなど一つの活動ばかり長引かせず、**飽きる前に切り替える**(⑥)。
- ・**個人差に応じるためのひと手間**。ヒントカード、板書メモ、別メニューの用意等(⑦⑧)。
- ・学級全体に投げ込む**学習課題は難易度高めに設定**し、活発な学び合いに導く(⑧)。
- ・並ばせて行う個別指導は極力行わない。必要に応じて教師が机間巡視をして対応(⑨)。

授業づくりに関しては、学校教育課より基本的な在り方(宇都宮モデル)や実践例が紹介されています(教育委員会キャビネット>学校教育課>授業力向上 参照)。さらにそこに特別支援教育の視点からの配慮や工夫が加わることで、行動改善が図れる子や、問題が目立たなくなる子が少なからずいるはずです。